コロナ禍の大学生活に対して学生は何を 振り返ったのか?

――教育・学校心理学の講義で学んだ知識を用いて――

田中 孝治*

What Did the Students Reflect on College Life during the Coronavirus Pandemic?

—Using Knowledge from Lectures in Educational and School Psychology—

Koji Tanaka*

It is important to exploit educational and school psychological knowledge to verbalize and conceptualize reflections on college life under the coronavirus (COVID-19) pandemic. This study qualitatively analyzed two types of reports completed as a part of a lecture: reflective writing, which asked students to relate the knowledge from the courses to past days, and an impression essay, which asked them to reflect on the reflective writing. The results showed that students selected psycho-educational service for learning aspect (25 of 36 students) and motivations (19 of 36 students) as reflection targets. Moreover, in a critical case sampling with Steps for Coding and Theorization (SCAT), a student recognized learning about contextual adaptation abilities for learning. Students' descriptions of their impressions reveal that they perceived this reflective writing assignment as a good opportunity to reflect on receiving psycho-educational service and own learning during the COVID-19 pandemic.

キーワード:自己調整学習、経験学習、学び方の学び、心理教育的援助サービス、質的データ分析

1. はじめに

昨今の急激な技術革新に伴って、ルーチンワークやマニュアル化された仕事が減少している傾向にある (1). 急激な社会環境の変化は技術革新によるものだけではなく、地球規模の気候変動や未知なる感染症の世界的拡大などの地球環境の変化もまたその一つである. 予測が容易な安定した社会であった時代には、知識やスキルを一度身につけさえすれば、生涯にわたって役立つことがある程度約束されていたが、急激に変化する予測困難な社会となった今日では、それらが生涯にわたって役立つとは限らない. このような時代においては、これまで教える側の立場であった人

たち (例えば、教師や上司) であっても、未知なる問題に対して、何が問題で何を解決すべき目標とするのかといった問題解決の正解を把握しているわけではない。また、必ずしも正解がある問題であるとは限らず、誰かから正解を教えられたり、知識を与えられたりすることを待っていては、社会の急激な変化に適応することは困難である。そのため、社会の変化に適応していくためには、未知なる問題に対面した際に、問題解決に対する受動的な存在ではなく、問題に対して自ら学び、問題解決のための新たな知識を創り出す能動的な存在であることが求められる⁽²⁾. このような背景の下、学校教育においては、教えられることで学ぶ受動的な学習から、自ら学ぶ力の育成を重視した問

^{*}金沢工業大学情報フロンティア学部(College of Informatics and Human Communication, Kanazawa Institute of Technology) 受付日:2021 年 3 月 2 日;再受付日:2021 年 6 月 29 日;採録日:2021 年 8 月 26 日